「聖霊で証印を押され」　　２０２２年7月17日

エフェソの信徒への手紙１：３～１４

佐々木　佐余子

今朝からエフェソの信徒への手紙を学びます。エフェソは今のトルコにあり、地中海の海沿いの最西端に位置する大きな町です。政治文化の中心であり、大商業都市でもありました。町にはアルテミス（別名ダイアナ）の大神殿があり、その大神殿は何と奥行100メートル、間口40メートルの大きな神殿でした。高さ16メートル、直径が2メートルの円柱36本で天井が支えられていました。その中にアルテミスの女神が安置されていたのです。この女神がエフェソの守護神でした。宗教と呪術（じゅじゅつ）の町で、多くはギリシャ人でしたが、ユダヤ人も混じっていたのです。ここでパウロは、第3回目の伝道旅行で3年間滞在し、キリストの集会を立ち上げました。使徒言行録に記されているのですが、パウロはエフェソである騒動に巻き込まれたのでした。エフェソにはアルテミスの女神の模型を造って金儲けをしている人たちがいたのですが、パウロが大胆にも「手で造ったものなど神ではない」と言って多くの人たちを説き伏せて真の神に立ち返らせようと伝道していたのでした。それで地元の人々は、商売が不振になると思い、パウロを捕まえようと騒動になったのでした。群衆はあれやこれやとわめきたてて混乱しました。そこで町の書記官がなだめてパウロを弁護したのです。「この者は神殿を荒らしたのでもなく、我々の女神を冒涜したのでもない、本日のこの事態に関して、我々は暴動の罪に問われるおそれがある。」こういって書記官は集会を解散させたのでした。（使徒言行録19：23～40）町の書記官はクリスチャンではないのです。しかし、神はこういう人を立てて用いられるのです。冒涜すると言うことは、神聖なものの権威をけがし傷つけることを言いますから、パウロは「手で作ったものなど神ではない」と言っているので、或いは冒涜罪に抵触しているかなと思いますが、でも所定の手続きをしないで騒動を起こしたことに対して、群衆に罪があると書記官が判断したのです。パウロは自由になって次の伝道地に赴きました。

パウロはこのエフェソの信徒への手紙をどこで執筆したのでしょうか。今まで何人かの学者先生方が研究されているのですが、断定は難しく最近の研究成果によると、この手紙は大体紀元80年から100年までの間に書かれ、場所は小アジア今のトルコで執筆されたのではないかと言われています。

この手紙はパウロが囚われの身である獄中で書かれたのです。エフェソ書6章の20節に「わたしはこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語るべきことは大胆に話せるように、祈ってください」とあり、鎖につながれている、と言っているので囚われの身であることがわかります。

3節から14節は神の救いのご計画が述べられています。4節を見ると、「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」とあります。とても不思議な御言葉です。天地創造の前に、つま

り、この世界が起こる前にもうすでに、神は一人ひとり選び分かち、そういう人たちを聖なる者、汚れのない者にしようとキリストにおいてお選びになった、と書かれているのです。とても驚きです。でもそのように考えると、命の大事さが、尊さがわかります。人間が偶然にただ生まれたのではなく、実に天地創造の以前にキリストにおいて選ばれて、この世に生まれた、そのような誕生の倫理観は他の宗教にあるでしょうか。『子供さんびか』にこのような曲があります。「生まれる前から、神さまに守られてきた友達の誕生日です。おめでとう」というさんびかですが、富岡ぬいさんという方が、１９６６年に作詞しました。若い頃はここを読んで、「そうかしら」位にしか感じませんでしたが、高齢になるとその有難さがわかります。神さまはそのように自分を愛してくださったのか、と思うのです。心境の変化です。でもキリスト教は本当に命の大切さを教えているのですね。

土曜日のテレビで３チャンネルでキリスト教の番組があるのですが、海の断崖で自殺をしようとする人を助ける牧師のお話がありました。皆さんも見た方がおられると思いますが、藤藪庸一（ふじやぶよういち）と言う先生のお話です。和歌山県の白浜町の断崖で自殺志願者の話を聞き「思いとどまって、自立をしなさい」と諭すそうです。その先生は白浜バプテスト基督教会の牧師さんなのです。ただ止めるだけではなく、その先生は普段弁当屋を経営していて、保護した人たちと一緒に働いて、調理技術を学んでもらい、自立への道をつけさせるのだそうです。その活動は映画にもなって「曙光（しょこう）」という映画のモデルになったそうです。「神はすべての人を愛している。すべての人に価値があり、尊いということ。それを伝えたい」とお話しされていました。２０年間で９２０人の人たちを保護したそうです。４節のみ言葉を読んで、その先生を思い出しました。

7 節にこのようにあります。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです」とありますが、アーメンですね。私たちの一生について廻る原罪は、決して水などではいくら洗っても落ちないのです。洋服に付くシミは洗剤でこすって落ちるでしょう。けれど人間の原罪は、主イエスを救い主と信じてそのキリストの血潮で罪を洗い清めていただくほかありません。

ここで原罪という言葉をもう一度おさらいしてみたいと思います。教会の伝統的解釈によると、人間の原罪は元々アダムとエバにさかのぼるのです。創世記にありますが、皆さん方もよく知っているところですが、神はご自分にかたどって人を創造されました。アダムとエバです。ところが 2 人は、神に不従順でありました。神の戒め「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」という戒めに逆らい、取って食べたのです。神はお怒りになり、2 人をエデンの園から追放しました。神に従わず、蛇に従ったためです。ここから人間の原罪が子孫にまで、まるで遺伝子のように流れていくのです。聖書によると人間はこの 2 人から始まったとされています。21 世紀のわたしたちにもこの原罪が流れているのです。原罪の教えは子供でも知っていることなのです。私は前、ある幼稚園で礼拝説教を担当していました。アダムとエバのお話をすると、4 歳児がこういうのです。「そうだよ、僕も悪い心は持っている

よ。」そんな小さい頃から、自分は悪い心を持っていると知っているのです。パウロは言っています。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」（ローマの信徒への手紙 5:12）ですからこの原罪は死ぬまで続くのです。けれど、神さまは愛の方なのです。主イエス・キリストを送ってくださいました。キリスト教では、人が神を信じないで的はずれの生活をする時、その人は罪びとだと解釈します。神を信ぜず、自分を神として生活することが罪の生活なのだと教えます。ですから主イエスを救い主と信じる人は、的を射た生活をしており、その人は十字架の血潮によって罪が贖われ、原罪はありつつも救われた生活をしていると考えるのです。毎週、主日礼拝を捧げ、己の罪を悔い改めて、主イエス・キリストにのみ礼拝を捧げる生活は、救われた生活なのです。9節に「秘められた計画」とありますが、どのような計画でしょうか。神の秘められた計画とは、時が満ちて、この地上に主イエスがご降誕され、救いのみ業が完成されるというご計画なのです。神はローマ帝国が一番栄えたころ、遅からず早からず丁度いい頃に、イエス・キリストをこの世におつかわしになりました。旧約時代ではまだ時が熟しておらず、捕囚後すぐではまだ第２神殿が完成していないし、その後、ローマ帝国が起こって、世界を制覇し文化の中心になった時が伝道に一番良い時なのです。その頃はもうすでに旧約聖書の３９巻は揃っていて、預言者の預言通りにイエスがお生まれになるという段取りが最適なのでした。旧約聖書という土台が大事なのでした。１０節に「こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです」とパウロは言います。１１節の後半に「約束されたものの相続者とされました」とあります。ここを口語訳で読むと、「キリストにあってあらかじめ定められ神の民として選ばれた」とあります。前もって神の民として選ばれた人は、どこまでも天の国を目指すのです。それは約束された聖霊で証印を押されているからです。イギリス人のジョン・バニヤンという人がある本を書きました。題名は『危険な旅』（天路歴程）です。かいつまんでお話しますと、その家族は６人家族でご主人も奥さんも子供たちも皆信仰深い家庭でした。ある日、クリスチャンという名前のご主人が自分の重い罪を背負って旅に出るのです。彼は救われるためにはどうしたらいいのかと考え、天の国を目指して旅に出たのです。クリスチャンはヒトデのような大きな自分の罪を背負って腰を曲げながら旅をします。途中福音者という人に出会ったので「この大きな荷物を下ろしたいのだけれどどうしたらいいでしょうか」と聞くと、福音者は「あの輝いている光」の方向に行きなさい、そこに行って門を叩けば教えてくれるよ」というので旅を続けるのです。途中友達に会って一緒に旅をするのですが、泥沼にはまってしまい、その友はあきらめて自分の家に帰るのでした。クリスチャンは一人歩いていると、道の両側に救いの石垣があり、道を歩いて行き、丘のふもとまで来るとそこにお墓があり、十字架が立っていて、その十字架の影がクリスチャンに落ちた時、背中の大きな荷物（重い罪）がするりと抜け落ち墓の中に吸い込まれたのです。クリスチャンはとても喜びました。十字架の影が重なっただけで罪の重荷

がほどけたのです。その時、輝く姿の人が近づき、「あなたの魂は罪から清められました」と言ったのです。そして泥だらけの服を脱がせて、光輝く新しい服を着せてくれたのでした。クリスチャンはこれから天の門を目指して巡礼の旅を続けるのです。物語はこれからずっと続きます。クリスチャンはいろいろな試練に会いながら、やっと天の門に到着し、神の国に入るというお話なのです。このお話はクリスチャンという人が見た夢の中のお話しなのでした。１６７６年に書かれました。エフェソ書１章１３節を読むと「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。」１４節「この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです」とあります。わたしたちは聖霊で証印を押されているのです。「この者は神の民ですよ」と、わたしたちはクリスチャンのようにやがては天の門に着き、黄金の神の国に招かれているのです。